

## 加齢に伴う老化

患者さんから便りにさわるのは、医者冥利に尽きる。が、時には、神様がマジッシヤンと勘違いされていたりして。

86歳のY子さん。血圧は少し高いが、元気で一人暮らしをしていた。ある時から「ねえ、センセ。私、もう死にたい。これ以上長生きしても良いことない。早く迎える来ないかしら」と言い出すようになった。

特に変わったことがあったわけでは無い。「足腰は弱る。耳も目も、物覚えも、悪いところだらけ」と愚痴が多い。でも、うつ病ではなさそうだ。「死にたい」と言うのは、実は「死にたくない」の裏返しか。思つように体が動かなくなる不安。誰の役に立たないまま生きることの寂しめ。つい、誰かに甘えたくなる。

だが、「センセ、なんとかがつて」と絶望ひねられても、加齢に伴う老化はいつにもならない。死の恐怖や不安もいつにもできなない。となれば、ボンクラ医者は、「私の知恵」に頼るしかない。お釈迦様は、「人身受け難し、今口にあへく」と仰られた。人間に生まれてきたことは、大変に喜ばしいことだ。それは、盲目の亀が100年に一度海

面に浮かび上がる時、たまたま浮いていた棒の穴に頭を突っ込むほど有り難いこと。「盲亀浮木」のたとえである。

ま、頭の良いひとは、盲目の亀が100年も生きられるワケがないとか、亀の頭がはまる穴なんていかにも作り話っぽいとか、ばかにするかもしれない。が、単純なワッシーなんぞは、そう聞いただけで、この世に生きることがなんとなく有り難く、大切にしなければ罰が当たるように思つのである。

「死にたい」となると口癖になっている、ひよんな気が起きないとも限らない。それだけでなく、マイナス思考で、ひとは離れていく。ここは、「今日も有り難い。生きているだけでもうけもの」と、笑ってみようか。

(石黒修三=いしほろくりニック・脳神経外科専門医・2/7北國新聞掲載)